



5人はそれぞれフロントでチェックインして、男女別の部屋に分かれる。それぞれ男子3人、女子2人の相部屋だ。まあ、これはホテル代の節約でもある。半地下のホテルのこの部屋には窓がない。エントランスや庭に面した側の部屋には窓やベランダがあるのだが、お高いスイートルームなので、彼らには手が出ないわけだ。そのかわり、この部屋には面白い仕掛けがある。

「殺風景な部屋よね」

部屋に入るなり美空がつぶやく。

「しかたないよ。これでも予算ぎりぎりなんだから。それに、こういうことも出来るんだよ、こっちは」

サラはそう言うと、部屋のアウトバンドパネルを操作する。次の瞬間、壁や天井全体がガラスのように外の景色を映し出した。

「ね、こうすれば窓はいらないでしょ」

「すごい、これどうなってるの?」

「基本的にはサラウンドモードと同じ仕掛けなんだけど、それを意識じゃなくて、実際に壁や天井のパネルに投影してるのよ。光線の方もプログラムで正確に再現してるから遠近感もあるでしょ?」

「これって外の景色なの?」

「これはそうね。でも、月とか周辺軌道の様々な映像をリアルタイムで映せるわ。これがこのホテルの売りのひとつなの」

「これって、全部の部屋にあるの?」

「あはは、男子には内緒だよ。全周の画像を写せるのは一部の部屋だけなのよね。隣の部屋は壁の一部だけよ。まあ、DI使えば同じ画像をサラウンドモードで写せるからあまり変わらないんだけどね。こっちのほうがちよっと高級感があっていいでしょ」

つまり、これは女子の特権なのだ。

「さて、ダイナーの前にちよっと着替えでもしようか。シャワー使ったら先にいいよ」

「じゃ、ちょっとシャワー浴びてくるね」

美空がバスルームのドアを開ける。

「ねえ、さすがにここまでやることはないんじゃない？」

「いいじゃない、開放的な雰囲気さ」

「外から見られてるみたいで落ち着かないわ」

服を脱ぎながら美空が言う。

「気にしすぎだつて。どうしても気になるなら天井だけにしようか？」

「そうしてよ」

半月状の地球が輝く空を残してバスルームの壁が戻ってくる。美空はちよつとそれを眺めていたが、やがて下着を脱ぎ捨てるとシャワーを浴び始めた。小柄で華奢な白い身体が湯気にかすむ。

その頃、隣の部屋では……

「サラウンドよりこつちの方が、なんとなく雰囲気あるね」

窓からの景色のように見える外部映像を見ながら、アンリが言う。

「まあ、部屋にいる感覚で閉塞感がないからね。どうせなら壁全体に映してくれればいいのにな」

と、フランク。

「あれ、ディブ、お前何やってんだ？」

「ふふ、そのうちわかるよ。お約束だろ？」

「お約束……って？」

ディブは宙を見ながら何かをしている様子だ。たぶん、何かの仮想パネルを見ながら操作しているのだろう。

「よし、つながった」

その直後、窓の画像が切り替わる。いまひとつはつきりしないが、なんとなく人の姿っぽい。

「これって・・・」

アンリがつぶやく。

「お隣さんの環境センサーの赤外線画像さ。それもバスルームのな」

「おい、いいのかデイク。バレたら大変だぞ」

「大丈夫さ。まさか、環境センサーで覗けるなんて思ってもみないだろうさ。でもなあ、これはモーションセンサーを兼ねてるから一種のカメラみたいなものなんだ。ちよつと画像処理してやれば、結構きれいに見えるんだぞ。待ってるよ」

デイクはそう言うと、またなにやら操作を始める。同時に画像が少しずつはつきりしてくる。

「よし、これで色変換して・・・どうだ」

映像はかなり生々しい感じになってきている。湯気の影響でまだかすんではいるが、後ろを向いている身体の線がはっきりわかる。

「これ、美空か？」

「背丈からしてそうみたいだね」

アンリとフランクもなんとなく我を忘れている。

「よし、もうちよつと鮮明に・・・」

デイクがそういった瞬間、画像が途切れて一瞬ブロックノイズが入る。

「あんたたち、なにやってんのかなあ？」

そこにはサラの顔が大きく映し出されていた。

「環境センサーとは、なかなか味なマネするじゃない？ これはムラカミ君の仕業かな？」
「え、バレてる？ なぜだ？」

デイクはかなり慌てている。

「あんたたちが考えることなんか、最初からお見通しだったの。この部屋のセンサーとかカメラにはあらかじめトラップを仕掛けておいたのよね。このぞき魔ども、観念なさい」

「しまった、サラがいるのを忘れてたぞ。全部読まれてたってか？」

「そうらしいな」

「これ、まずいよね」

バスルーム覗きの現場を押さえられてしまったからには、この後の騒ぎが恐ろしいわけで。

「さあて、どうしてくれようかなあ」

画面の中のサラがニヤリと笑う。

「サラ、どうしたのよ」

と後ろから美空の声。と同時にサラの後ろに下着姿の美空がいきなり現れた。まさか、ここに見えているとは美空も思っていないだろう。

「あ、こら美空、だめ！」

「え、何？、え、あゝっ！」

美空も気づいたらしく、いきなりうずくまる。

「サラ、何やってんのよ、隣とつながってるんだってら言ってよね」

「ごめんごめん。でもさ、こいつらその前にバスルーム覗いてたって言ったらどうする？」

「嘘、マジで？」

これはまずいことになった。男子たちはそう思った。美空が覗かれたことを知ったら、後の祟りが恐ろしい。

「覗いたって、いったいどうやって？」

「いやあ、それがさあ、環境センサーの画像を細工してたみたいなのよねえ」

「環境センサーなんかで覗けるの？」

「それは、ムラカミ君に聞いてみたら？」

サラが意地悪そうな感じで笑いながら言う。

「こら、デブ。どういうことよ！」

美空はしゃがみ込んだまま、壁に映ったデイブの顔をにらみつける。

「あ、いや、その、シルエットくらいは・・・」

「し、シルエット!？」

美空が赤面しながら叫ぶ。

「ちょっと見てみよっか」

サラが言うと、脇に、さっきの映像が映し出された。

「あ、あんたね」

と言ってから美空は絶句する。

「で、もうちょっと加工すると、こうなるわけさ」

サラが言ったとたんに、映像がかなり鮮明になる。体の線どころか、かなり細部まで見えて
いる。

「な、な・・・なにこれ！」

美空は、体全体がもう真っ赤だ。

「ま、安心してよ。これは連中は見ていないからさ。この画像処理をやらかす前に止めてお
いたから」

サラも美空の反応をちよつと面白がっているようだ。しかし、男子たちの手の内は既にすべ
て暴かれてしまった。隣の部屋の3人は、ちよつと顔色が悪い。

「で、この始末をどうつけようか、って話なんだけどね」

「どうつけるものにも……、あんたたち、覚悟しなさいよね」

美空は思わず立ち上がって、壁の3人を指さす。だが、自分の姿に気がついて、またうずく
まり、持っていたバスタオルを壁に投げつけた。

「ねえ、こいつら3人、ひんむいて廊下に放り出すつてのはどう？ 首に、僕たちはのぞき
魔です、って札つけてさ」

「そ、そんなあ……」

サラの一言に、一番慌てたのはアンリである。

「甘いわよ、サラ。一生後悔するようなやつがいいわね。ちよつと考えるから、首洗つて待
つてなさい」

美空がそう言うと、画像が切れた。さて、男子部屋は戦々恐々である。

「おいダイブ、この始末どうつけるんだ？」

フランクがダイブに食つてかかる。

「お前らだって、何も言わずに見てただろう、一蓮托生だよな」

ダイブとしては、ここは開き直りしかない。アンリはちよつと青ざめている。

「どうしよう、美空を怒らせるとあとが怖いよ」

「責任取って、何か手を考えろよダイブ」

「責任でも、どう取りやいいんだよ。俺一人廊下で裸踊りでもしろつてのかわ？」

「それはいい考えかもな」

「それなら、お前らも同罪だ、一緒にやるよな」

「そんなあ、僕は嫌だよ」

男子たちは、ちよつと仲間割れ気味になっている。

「こうして見てるのも結構面白いでしょ」

隣の部屋では、サラと美空が男子部屋の顛末を全部見ている。サラは自分たちの映像は切つたが、相手方の映像を残したままにしていたのである。

「向こうは気づいてないの？」

「デイクあたりなら気づくかもしれないけど、今はそれどころじゃないでしょ」

「それにしても・・・」

美空が服を着ながらつぶやく。

「失礼したらありやしない、人を猛獣みたいに。怒らせると怖い、つてなによ！」

「まんまだと思うけど？」

「あんたまで？」

まあ、人間自分に対して客観的になるのは難しい。これまでも美空は何度か怒りにまかせて、男子たちに無理難題をふっかけた実績がある。サラもそれはよく知っているので、この状況を作ることで、すこし美空の頭を冷やす時間を作りたかったのかもしれない。一方、男子部屋では・・・

「とりあえず、謝りにいったほうがよくないか？」

フランクが言う。

「でもさあ、あの勢いだと飛んで火に入る夏の虫・・・になりそうだしなあ。それと、なんとなく美空の顔を見るのも気まずい気が・・・」

とデイク。

「でも、こつちに非があるのは明らかなんだから、僕も、こつちから動くのがいいと思うよ」

アンリも言う。

「それじゃあ・・・」

とフランクが立ち上がる。

「おい、どこへ行く気だ？」

「まあ、俺について来いよ。ちょっと考えがあるんだ」

3人は一緒に部屋を出る。

「あれ、あいつら逃げる気かあ？」

「んー、流れから言うと、詫びを入れに来る気みたいだけど。殊勝なというか、弱気というか・・・」

「ふん、そんな手に乗るかってのよ。来たら、目にも見せてくれるんだから」

「まあまあ、ちよっと様子を見ようよ。どんな手で来るか楽しみじゃない？」

「そうね。まずは出方を見ようか」

さて、女子2人は手ぐすねを引いて待つのだが、男たちはなかなか現れない。美空もだんだんイライラしはじめてくる。

「あいつら、マジに逃げたんじゃねーの？」

「うーん、逃げるったって、どこへ逃げるのさ。ここは月だよ」

「でも、遅すぎるわ。あいつら、また何か企んでるんじゃないの？」

美空のイライラが限界に近づいた頃、ドアのチャイムが軽い音をたてた。

「お、来たかな」

「遅いっ！ もう多少の詫びじゃすまないからね。覚悟しなさいよ」

美空はそう言うと、足を踏みながら大股に戸口に向かう。ドアを開けると、そこには男子3人。フランク、デイブ、そしてアンリ。デイブは、なんと大きな花束を持っている。

「こら、お前ら、今まで何を……」

と言いかけた美空だったが、この花束にはちょっと驚いたようである。一瞬、口ごもってしまっただが、気を取り直して続ける。

「な、なによそれ。そんな物で騙されるとでも思ってるわけ？」

「い、いや、そうは思っていないけど、手ぶらじゃ悪いと思って……」

ダイブが、気まずそうな顔をして言う。

「手ぶらだろうがなかるうが、そもそもが悪いじゃないの。この破廉恥野郎どもめ」

「すまん、つまり、その、あれは出来心というか……」

「あのね、出来心ですむんだったらケーサツはいらないってのよ」

美空は、待たされてたまったイライラを爆発させている。

「まあまあ、美空。ちょっと落ち着こうか」

サラが後ろから美空の肩に手を置いて言うのだが、美空は今にも食らいつきそうな顔をして男子たちを睨み付けている。

「なあ、とりあえず食事にいかないか。お詫びにご馳走するよ」

フランクが頭をかきながら言う。

「ふん、花の次は食べ物で釣ろうってわけ？ なめんじゃないわよ」

そう言ったとたん、美空のおなが、ぐうっと鳴った。美空は赤面してちよっと固まってしまふ。

「いいじゃない。ご馳走してくれるってのなら、ありがたくいただきます。話はそれから、ってことで」

タイミングよくサラが割り込んで、一同はとりあえず、ホテルのレストランへ向かうことに

なる。

「で？ 正直どうだった？ 美空は」

歩きながら、男子たちに向かってサラが言う。

「な、何を言い出すのよ、サラ……」

美空は真っ赤になって慌てている。

「もうかんべんしてよ。悪かったから……」

とアンリ。

「いやあ、しかし予想通りというか、期待を裏切らないというか、男つてのはみんな考えることが同じなんだねえ。わかりやすいというか……」

「予想通りって、サラ、あんた最初から知ってて私を先にシャワーに行かせたわけ？」

「あ、バレた？ てへっ」

サラがちよっと舌を出しておどけて見せる。

「あ、あんたねえ。それじゃあんたもこいつらと同罪じゃないの」

「いやいや、だから、一応寸止めだし」

「寸止めって、それ何よ。もう十分見えてたじゃない」

「もう、美空ったらまだまだ子供なんだから。あれくらいはサービスしなきゃ、大人の女とは言えないよ」

「あ、あんたねー、人ごとだと思って。それなら、今度はあんたがやってみなさいよね」

「じゃ、勝負してみる？」

「……」

今度は女子同士が仲間割れっぽい。しかも、話がかなりきわどくなってきた。男子たちは無言。ここでうっかり口を挟んでおはちがまわってきたら、集中攻撃されてしまうだろうことは容易に想像がつくわけ。

「こちら、お前ら、何ニヤニヤしてんのよ。変な妄想してんじゃないでしょうね」

まあ、口を出さなくても、流れ弾は不意に飛んでくる。男子は3人とも、いやいやとんでもないという顔をするが、アンリだけちよつと赤面している。それを見た美空が言う。

「凶星みたいね。まったく、男つてのはこれだから……。サラもこんな連中煽ってどうするのよ」

「いやあ、でも楽しいじゃん。ほら、もしかしたらさ、実は誰か美空のこと気にしてたり……。って、ないかな」

「な、何を言い出すのよ」

美空はちよつと赤くなる。しかし、ここは、男子たちも反応に困るところだが……

「ないない」

ときっぱり言ったのはフランク。

「フランク、あんたね、そんなきっぱり言うことないじゃない。別に私はあんたちなんか、なんとも思っていないけど……。なんとなく腹たつし」

そうこうしている間にレストラン前までやってきた5人。場所柄、このホテルのレストランは24時間営業なので、こんな夜更けでも食事はできる。

「いらつしやいませ。5名様ですね、奥のお席にどうぞ」

このレストランも実際は地下にあるのだが、天井や壁には外部映像が投影されているため、屋外のテラスにいるような雰囲気になる。レストラン全体が、コペルニクス外輪山の上に乗っている感じだ。もう日が落ちた空には無数の星と半地球、つまり半分欠けた地球が浮かんでいる。時折、上空をコペルニクス宇宙港に向かうシャトルがランプを点滅させながら通過していく。

「いい感じじゃない。ロマンチックよねえ」

サラはそう言うと真っ先にテーブルに座る。

「でも、相手がこいつらじゃねえ・・・」

と美空。まだ機嫌は直っていないようだ。

「でもさ、こんな場所で女二人も寂しいよね」

「まあ、見た目はそうね。寂しい女に見られるのも癪だし、しかたがないか」

男子たちは、そういう会話を黙って聞いているしかないわけだ。ここで下手に口を挟むとまた話がこじれてしまうので。

「ほら、いつまで突っ立ってんの。座りなさいよ」

美空が言うので、男子3人もようやくやく席に着く。サラは、もうアウトバンドでメニューを開いて見ている。

「さて、何にしようかなあ。奢りだしね。ちょっと頑張っちゃおうかな」

「そうね、何頼んでも文句言われる筋合い無いしね」

物騒な会話である。

「なあ、多少は手加減してくれよな。頼める筋合いじゃないのはわかってるけどさ」

とフランク。

「わかってんだったら黙ってなさいっての。奢りだって言ったのはあんたでしょ」

と美空。

「まあ、同じ学生の身だしね。払える限度くらいは分かってるから安心してよ」

とサラ。だが、この2人に安心しろと言われてもムリなことは男子たちもよく分かっている。これはもう覚悟を決めるしかなさそうだ。

「そうそう、デイブ、あなたは倍付けだからね。駅での一件もあるんだから忘れないでよね」

美空は容赦ない。

「わかってるよ。はぁ・・・どうとでもしてくれ」

デイブはもう観念しているようだ。旅から帰ったら自分の間は節約モードを余儀なくされそうである。それに・・・

「そういえば、デイブ。あれの準備はいいのか？」

「ああ、ぬかりないよ」

「あれって？」

どうやら、アンリはフランクとデイブの会話の意味がわからないようだ。

「あんたたち、また何か悪巧みしてるわけ？」

美空はこういう会話を聞き逃さない。いわゆる地獄耳というやつだ。

「あ、いや、なんでもないよ」

とフランク。

「なんか怪しいなあ、これ以上、美空のご機嫌を損ねない方がキミたちのためだと思うんだけどなあ」

とサラ。

「だから、何でもないって。そんなご機嫌を損ねるような話じゃないんだから、気にしないでいいよ」

デイブも言うのだが、美空はまだ疑っているような顔でデイブの目を見つめている。

「とりあえず、料理を注文しようぜ。話はそれからってことで」

「そうやって話をはぐらかすところが、めちやくちゃ怪しいんだけど……。ま、おなかも空いたことだし、まずは腹ごしらえね」

そうやって、各自、それぞれにアウトバンドのメニューから料理を選んで注文する。男子たちは、女子の様子をちらちら見ながら戦々恐々である。

「何こっち見てんのよ。心配しなくても、きっちり高いのを注文してあげるから」

美空が意地悪そうな顔をして言う。まあ、これは覚悟を決めるしかなさそうだ。どうせなら気持ちよく、豪勢にいこう。そう思うしかない男たちだったが、結果から言えば、女子たちもそこは心得ていたようで、注文は割と無難な線に落ち着いてくれた。

「あー食べた食べた、満足」

とサラ。美空はちよつと不満そう。

「ちよつと手加減すぎたかもね。なんとなく不完全燃焼だわ」

などと言いながら、こんどはデザートメニューの物色を始める。女子たちにとって、大昔からデザートは別腹なのだが、美空にとっては、どちらかと言うとデザートがメインなのである。以前も、附属高があるL2宇宙都市の中央街区にある、学生たちには有名なレストランのデザートを5人前ぺろりとたいらげて、周囲を驚かせている。しかも、メインに大きなステーキを食べたあとで・・・である。その小柄な体からはちよつと想像ができない食べっぷりだ。

「ここ、デザートも結構色々あるじゃない。じゃ、これと、これと・・・」

いつものことだが、美空はまた2、3人分は食べる気らしい。

「あんた、それだけ食べてよく太らないよね。うらやましいよ私は」

とサラが言う。サラの注文はコーヒーだけらしい。

「食べたいのはやまやまだけど、このところ運動不足でまずいのよね。残念だけども」

「燃費が悪いのかな、多少食べても太らないのよね」

「将来の旦那は大変だよ、美空の食欲を満たさなきゃいけないんだから」

「心配しなくても自分の食い扶持くらいは稼ぐわよ」

「だってさ、男ども。安心して持って行け、ってか？」

「何言ってるのよ、人をモノみたいに。それに、こいつらじゃ、明らかに力不足だわ、いろんな意味でね」

なんともはや、女子たちの会話に男たちが入り込む余地はなさそうである。そうこうしている間に、デザートが運ばれてくる。サラとフランク、デイブはコーヒー、アンリはケーキと紅茶、そして美空は・・・ケーキ2個にアイスクリーム・・・である。

「そりゃそうとき・・・」

コーヒカップを口元に運びながら、サラが言う。

「さっきの話は何だったのかな？そろそろ教えてくれないんじゃない？」

「いや、まあ、すぐにわかるよ。そろそろ時間だよな、デイブ」

「ああ、もうそろそろ・・・」

デイブがそう言った直後だった。周囲がぱっと明るくなった。頭上で何かが光った。

「何？これ」

美空が見上げた空には、大輪の花火。いや、花火をまねたホログラムと言った方が正しいかもしれないが、それでは風情がない。大昔の花火は現在でもその形を残している。だが、それは火薬を使った芸術ではなく、その燃焼過程とスペクトルを数学的にシミュレーションしたホログラムに置き換わっているのである。なので、これは空気のない月でも打ち上げ可能だし、学生の小遣いでもまかなえるくらい安上がりなのである。もちろん音も聞こえる。こちらは、アウトバンドで送られてくる疑似感覚だが。

「おお、綺麗だねえ。これ、もしかして君たちの仕業なのかな」

サラが言う。もちろん、仕掛けたのは男子たち、というよりフランクの提案でデイブがホテルに頼んでおいたというわけである。

「まったく、臭い演出よね。でもまあ、綺麗なことは認めてあげるわ」

と、美空もまんざらではない様子である。大昔から花火というのは人の心を強く揺さぶるものである。それは現在でも変わらない。色とりどりの光と、仮想現実とはいえ、腹の底に響くズンという音は、すべての感情を高ぶらせる。5人は、しばらく無言で花火に見入っていた。

「そういえば・・・」

美空がちよつと遠い目をして言う。

「私の実家の近くじゃ、今でも夏には本物の花火を上げてるのよね。もう千年も続いている伝統みたいんだけど、音と光だけじゃなくて、煙とか、火薬の臭いとか、いろんなものがまざって、気持ちが高まるのよ。こうして見ていると、そんな風景を思い出すわ」

「僕も子供の頃はセーヌ川のほとりで花火を見たものさ。パリの花火は、もうずいぶん昔に、ここと同じホログラムが変わっちゃってたけどね。東京はまだ本物をやってるんだね」

とアンリ。

「不思議よね。人って、こういう一瞬の美しさに惹かれるでしょ。私が住んでたワシントンの桜もそう。一気に咲いて、一気に散って。春のあの時期はなんだか切なかったな」

サラもなんとなく思い出にひたっているようだ。

「ワシントンの桜ってさ、元々は昔の日本国から送られたものらしいよ」

とフランク。

「え、そうなの？ 美空の住んでた所にも桜はある？」

「もちろんあるよ。花火が上がる隅田川の土手は、毎年春になると桜の花がすごく綺麗なんだよ。ソメイヨシノだったかな。桜にもいろいろと種類があって、一番見事なのがその種類だあって、うちの、おばあちゃんが言ってたわ」

「そういえば、家に、ずいぶん昔の桜の絵が飾ってあったよ。うちの先祖は日本から渡ってきたらしい。たしかムラカミってファミリーネームは古い日本の名前だそうだけど」

「そうね、ムラカミって名前は私のまわりにも何人かいたわよ。日本地域に多い名前なのは

確かね」

花火の音に時々会話を邪魔されながらも、5人は話で盛り上がっている。フランクの作戦は見事に成功したようで、女子たちも、もうさっきの出来事などすっかり忘れてしまっているようだ。

ひとときわ派手な連発のあと、しばらく沈黙が訪れる。

「もうおしまいなのかな？」

とサラ。

「そうだな。二十分間って話だったから、そろそろおしまいだと思うよ」

ダイブが言う。

「最後に・・・だよな」

フランクがダイブを見て言う。ダイブは少し照れながら、美空を見て

「最後に、これが俺の気持ちだ」

そうダイブが言った瞬間に、空に、花火のような光で文字が描き出された。

「美空へ、・・・え？、あ、愛を込めて？」

「うわー、ムラカミ君ったら、やってくれるじゃない。いきなり告白タイム？」

とサラが言う脇で、なぜかダイブは慌てふためいている。

「え、え、なんで？」

「・・・・・・・・」

美空のほうは真っ赤になって固まっている。フランクもアンリもかなり意表を突かれた様子だ。

「なあ、デイブ。たしか、お詫びをこめて・・・じゃなかったか？」

フランクが小声でささやく。

「ああ、そのはずだったんだけど、いったいどうして・・・」

これは何かの間違いなのか？ それともデイブの本心なのか。

「で、デブ！ これ、何の冗談よ。あ、あんた、しかも皆がいる前で・・・」

美空が叫ぶ。

「あ、いや、これは・・・」

デイブが口ごもる。様子からして、何か間違いがあったのだろう。しかし、デイブはいまいち齒切れが悪い。

「あんた、まさか本気なの？」

そんなデイブの様子に美空がたたまかける。デイブは少し迷った表情を浮かべたが、意を決したように美空に向かってこう言った。

「ああ、本気だ。美空が好きなんだ」

これには全員が驚いた。

「えーーーーー」

まさかの告白である。察するに、美空に少なからず好意を抱いていたデイブは、この手違いを否定することもできず、引っ込みがつかなくなってしまう・・・ようである。しかし、これは仲間たちにとっては、まさに仰天の出来事だ。

「おい、デイブ、お前・・・」

「いいんだ、いずれ言おうと思ってた事だから。今すぐ返事をくれとは言わない。気持ち

決まったら教えてくれ」

「……」

そういうデイブを美空は直視できずにいる。うつむき加減で、視線をそらしながら小さな声で言った。

「少し……時間をちょうだい」

「ああ、わかった」

即座に拒否されなかったのは、脈があるのか、それとも全員の前で恥をかかせたくないという思いやりなのか……。

「さて、そろそろ部屋に帰って休もう。もうずいぶん遅い時間だし」

「そうね。後は明日のお楽しみーってことで」

フランクの一言で、その場はお開きとなり、それぞれの部屋に戻ったのだが、美空はなんだか考え込んでいる様子で、さっさとベッドに潜り込んで寝てしまい、男子部屋でも、デイブがなんとなく気まずそうにしていたので、とりあえず明日……ということになったようである。